

特集 2

学ぶ×働く移民女性たち

報告 2 つねに前に向かう河の流れのように

山崎パチャラー

タイ出身。1991 年来日。「女性の家 HELP」スタッフを経て、移民女性や子どもの支援組織「ウェラワーリー」を設立。

生い立ち

私の両親は、一軒の小屋の隣に板をひいて屋根を作って住ませてもらっていました。私が小学校に入った時に、初めて電気が開通しました。私はランプの時代に生まれた人なのです。日本よりは多分 20 年遅れていると思います。小学校卒業後は進学するお金がなく、高校の先生の家で子どものベビーシッターをしていましたが、給料は全部親が取りに来ました。親はそのお金を貯めて家族の家を建ててくれました。その後、その子どもが 5 歳になり、私は学校に行きたいと思うようになり、土日だけ学校に通って高校までの資格を取りました。

実家はタイの東北部なのですが、親の手伝いといっても畑や田んぼは持っておらず、他の仕事もないため、バンコクに働きに行きました。バンコクでは、縫製工場を持っている親戚に雇ってもらう予定でしたが、赤ちゃんが生まれて工場を閉めてしまったため働きませんでした。その後、バンコクで有名な大きなレストランに声をかけていただき、10 年くらい勤めました。そこに客として来ていた日本人と結婚することになり、タイで結婚式を挙げました。それが 1991 年のことで日本に来ました。

日本へ

夫とは年齢の差がありました。夫はアパート経営とタクシーの運転手をやっており、男は自分ひとりだからしっかりしなければならない、と言っていました。夫の母親とは一緒に住みました。夫は子どもが生まれたことは喜んでくれたのですが、私が近所の人と会話することは全て禁止されており、「絶対人と話をするな」、「ずっと家にいなさい」、「子供の面倒を見なさい」と言われ、子どもを連れて外に遊びに行く、同じ地域の人や子供が遊びに来るとそれも怒られました。近所の人が見物板を持ってくると私の背中を押して「隠れろ」と言いました。意味がわかりませんでした。夫の妹は、毎日私の様子を見に来ました。彼女は子ども 2 人を私に預けて仕事をしていました。私は、家にいるのも息苦しいため、自分も働きたいとお願いしましたが、働かせてもらえませんでした。

帰化の手続きもしていました。帰化の許可の結果が来て、法務局の職員二人が家を訪問

することになった時、私は姑に外に追い出されて、「いつも家にいない。子どもを連れ出して家に帰ってこないのだから。」という話をしました。職員2人は、帰化の許可を出すために来たのですが、その話を聞いたらそのまま帰ってしまい、その後何の連絡もありませんでした。後日、私の方から「どうなりましたか」と問い合わせをしたところ、「あなたには許可は出ない」と言われました。それはとても悲しかったです。

車がないと、生活できない地域でした。小学校の送迎バスが朝8時と夕方5時半に通るだけです。子どもを病院まで連れて行くには、自転車に3人の子供を乗せる必要があります。一番前のカゴに1人乗せ、1人はおんぶで1人は前にだっこをするか、1人を後ろに乗せるしかありませんでした。その光景が危ないことから、近所の方から免許をとることをすすめられました。車の免許を取って自分で働きたいと思い夫にお願いをしたのですが、認めてもらえませんでした。夫は運転手の役割が偉いと思っていました。

タイで免許証をとって、日本で国際免許に書き換えられると大使館で言われたので、一度タイに逃げて免許を取ろうとしました。しかし、結局夫は国際免許に書き換える手続きをさせてくれませんでした。

私は、子どもの世話や、送り迎えのために免許が必要ということを夫に伝えました。夫は、免許証が欲しいことは理解してくれましたが、日本語がわからないから無理だと言われました。私は、夫の友だちの奥さんから免許の教科書を見せてもらい、独学で自動車教習所の教科書を勉強した結果、教習所に通うこととなりました。成績は高校生よりもずっといいと言われました。1ヶ月毎日通い、試験に受かりました。とても嬉しかったです。

それから、夫は働くことを許可してくれました。ホテルでベットメイキングの仕事をしました。最初の1週間は何事もなかったのですが、2週間目以降、毎日夫から職場に電話がかかってきました。帰りの時間も駐車場で待っていて、家に帰るかをずっと見張っていました。毎日の電話があまりにもひどかったため、ついに働きに行けなくなってしまいました。

夫は私と子どもを外に出したがりませんでした。子どもたちを外に出さないために、クレーン車やショベルカーを使って畑を埋めてアスレチックを作りました。近所の方が遊園地を作っているのかと大騒ぎになるほどでした。アスレチックは完成しましたが、これは、そこで毎日遊んでいなさい、出かけないで家にいなさい、という命令を意味していました。

夫は結婚した当初からお酒が好きでしたが、次第にお酒に飲まれてしまい、アルコール依存症になり暴力を振るうようになりました。暴力は私と、私に似ている長男に向かいました。長男が風邪を引いても病院に連れて行かないほどです。私は、家にいるだけで子どもを育てて、子どもが大きくなると暴力もひどくなりました。

長男が5歳の時、喘息がひどくなり入院しました。入院中に、夫はアルコール依存症がひどくなり、幻聴と幻覚がある状態でした。1週間の入院から長男が帰ってきたその日の夜、子どもたちを寝かせると、夫は子ども部屋に上がり、「あそこにいる蛇、お化けがいつ

ばいぶら下がっている。怖い。」と言いました。暗い中で何かを言っているようでした。その後、夫が子どもに飛びかかって、子どもの首に手をかけていました。私はショックで、走って下に降りて警察に電話をかけました。「夫がお酒で頭おかしくなって幻覚が見えています。今日退院したばかりの子どもが首を絞められているから急いで来てください。ただ、深夜の12時だったので近所の迷惑になるといけないので、サイレンをつけずに静かに来てください。私が外で待っています。」と伝えました。ところが、警察は私の言ったことは一切無視して、まず玄関でチャイムを押しました。姑が対応し、「この女が子どもの面倒を見て疲れて頭がおかしくなっている。日本語がわからないから気にしないで。」と言い、警察は帰ろうとしました。私は、このまま残ったら殺されると思い、子ども部屋に上がって3人を起こし、服はそのまま羽織るコートなどを用意しました。「今お父さんとおばあちゃんが警察と話しているから、あなたたち3人走って車に乗りなさい」と伝えました。子供たちはみんな裸足のまま車に駆け込んで、そのまま私も車に駆け込みましたが、警察は夫の味方となり私を止めようとしてきました。夫は、車のドアを開けられないのでハンマーを持ってきてガラスを叩きましたが割れませんでした。彼がドライバーを持ってきてナンバープレートをはずしたところで、私が車から降りずに走らせようとする、警察はパトカーで私を妨害して、「走らないように。ナンバープレートがないからダメだ。あなた違法だから捕まるから」と言いました。私は「留置場に入れてもらいたい、捕まえてほしい」と言ったのですが、「ナンバープレートがないからダメだ」という口論になりました。その後、警察は「わかった、じゃあ誘導するからついてきて」と言い警察に行くことができました。私は、「夫がついてこないように止めてください。あなたたちも見ていたのですよね。」と警察に頼みましたが、夫は後からついてきました。警察署の一階で、私と子ども3人が立っていたのですが、追いかけてきた夫が車を降りてまっすぐ来て、「なんで俺の言うことを聞かないか」と言って、退院したばかりの長男の頭を殴り、長男は3メートルぐらい飛んで行ってしまいました。しかし、警察は夫を止めませんでした。私は警察を許せませんでした。暴力ですし、子供の虐待です。夫が普通じゃない様子なのにそれでも見ないふりをして何も助けてくれない警察に対して、何のためにやっているの、何のために私はあなたたち呼んだの、と思いました。私は悲しくて、「早く留置場に入れてください。」と叫んだのですが入れてもらえませんでした。「この夫をなんとかしてください」と言ったのですが、それも受け入れてもらえませんでした。1時間くらい話した結果、子どもが病気だし私たちはここにいない意味がないからどこかに連れて行ってほしいとお願いしたところ、一軒しかない近くの旅館に連れて行ってもらうことができました。

旅館のおかみさんには、「こういう事情があるから、夫が来ても入れないでください。」とお願いをしました。警察にも同じお願いをしました。旅館に入った1時間後の午前4時くらいに夫から電話がかかってきました。その後夫が来たのですが、おかみさんが「そんな人はいない」と言って夫を帰してくれました。しかし、ここにいないとおかみさんに迷

惑をかけてしまうので、朝になったらすぐに出て行きました。旅館を出る時、みんなパジャマのままで靴を履いていなかったの、おかみさんが、お客さんが使うスリッパとバスタオルをくれました。病気の子がいるからお金はいら無いと言、おにぎりをたくさん作って持たせてくれました。

朝6時に役場の前に行き、8時30分に役場が開庁すると戸籍謄本を取得する手続きをしました。私自身が家から逃げた時にわざわざ戸籍謄本をなぜ取りに行ったかという、ビザを更新しなくてはならないからです。日本にいるためにどうやって自分でビザの更新手続きをすればいいのかと考えました。戸籍謄本を取ってビザの更新手続きをしなくては、子どものパスポートを作ってあげなくてはならない、と考えました。そして、子どもをタイに連れ帰ろうとも思いました。その後、友だちに電話して成田駅まで送ってもらいました。

成田からシェルターに向かいました。電車の中で、子どもがあまりにもお腹が空いて、おにぎりを食べたのですが、電車の中では変な目で見られていました。その時の総武線はとても長い時間を感じました。シェルターの最寄り駅に着き、無我夢中でスタッフに電話をして迎えに来てもらいました。

シェルターでの活動

シェルターは、外国人女性と子どもが入所していました。そこでタイ語スタッフとして勤めました。シェルターに入所しているときに申請したビザは一年更新のものしか取れなかったのですが、「あなたは永住が取れるのに、なぜ申請をしないのか」と入管に言われました。それまでは夫が拒否していて取ってくれなかったのです。シェルターに逃げた後に永住ビザに変更したいと思い、行政書士の先生に相談したところ、「嘆願書を出せば大丈夫。50枚集めましょう。」と言われて、嘆願書を作りました。1枚に3人署名できる用紙が1,000枚近く集まりました。

嘆願書を作る時は、すでにシェルターを退所していて、子供の保育園から広めてもらいました。当時東村山市に住んでいたのですが、東村山中の色々なところに配ってくれました。嘆願書は30枚ぐらいしか作っていませんでしたが、皆さんがさらにコピーして集めてくれて、とてもうれしかったです。永住の許可が出たとき、保育園の園長先生がパーティーを開いてくれました。永住権が取れるまでは、アパート探しも、「1年のビザだから」、「子どもが3人でうるさいから」、「外国人で保証人がいないから」と5件くらい断られていました。不動産屋で決まっても、その後に「申し訳ない、大家さんがダメだった」と言われたり、入居して荷物まで運んだのに「ダメだ」と荷物を出されたりしたこともありました。

日本語の勉強

シングルマザーとして生活を始めてから、日本語を本格的に勉強するために日本語学校に通いたかったのですが、日本語学校が家の近くになく、また子どもが小さくて夜間中学には行けませんでした。子どもは、まだ3歳と5歳と7歳でした。日本語を勉強したいと思い飯田橋にあるボランティア・センターに行ったところ、パソコン教室をやっていて、その勉強の中で日本語を学べるということだったのですが、本当にパソコンの話だけで、WordとかExcelで文書を作ったりしていました。その後、早稲田奉仕園でもボランティアで日本語を教えているということでしたが、先生との面接の段階で、「あなたは十分話せるから、勉強は必要ない」と言われました。「勉強がしたい。読み書きがしたい」とお願いしたところ、「読み書きは自分で練習しなさい」と言われました。「学校で練習したい」と伝えたところ、「あなたは日本語検定を受けなさい」と言われました。日本語検定について何も知らなかったのですが、本屋さんで教科書を買って、まずは2級に取り組みました。2ヶ月くらい勉強して受かりました。その後、ホームヘルパーの資格を取りました。

また、シェルターで働いた当時、お世話になった行政書士の、婚姻手続きなど戸籍関連のケースを手伝っていたのですが、その方から行政書士の資格を取ったらどうかと言われて勉強をしていました。当時は、タイのホットヨガのブームの時代だったので、ヨガのインストラクターも頼まれておりました。シェルターのスタッフをしながらヨガのインストラクターと行政書士の勉強をしている状況でした。ところが、その同じ年の年末に新宿区役所から働いてみないかとお声をいただき、そのまま今も役所に勤めて債務整理をやっています。新宿区役所では、生活福祉課の中で生活保護の受給者が来ると、必ず借金の整理をします。生活保護費で借金を返すことはできないので債務整理も必要になるのです。

ウェラワーリー設立

もともとパープルダイヤルという、外国籍のDVや性暴力の被害者に向けた多言語のホットラインで相談を受けていました。外国人が直面する一番大変な問題として、言葉の問題がまずあります。相談できるところがないことも問題です。困った時にどうしたらいいかわからないのです。とくに2011年の東日本大震災の時は皆パニックになっていました。その時、日本人と結婚しているタイ国籍の女性から電話で「タイに帰りたい」という相談を受けました。最初は、パスポートを大使館が再発行してくれない、という相談でしたが、なぜそういうことになったのか詳しく聞いてみると、夫がパスポートと彼女の身分証明などを全部隠して、彼女にクラブでの仕事を強制して、「1日80万円稼いでこい」と言うけれど、もうやりたくない、帰りたいと思って相談してきたというのです。今のクラブとは別のもっとお金が稼げる闇の仕事に行かないと、夫から罰を受けるということで、ひどい暴力もあり、それが耐えられなかったのです。つまり、単なるパスポートの話ではなかったのです。夫は、毎日お酒を飲んで寝て、彼女とメールでやりとりして監視し、連絡が途

絶えるとしつこく連絡をしてきて、そんな中で仕事に行くときはお金を持たせないためにSUICAしか使わせてくれません。携帯電話は夫名義で、夫はうつ病だからと生活保護を申請している人でした。しかし、彼女の相談は、最初は、帰るためにはどうしたらいいのか、パスポートを返して欲しいだけなのです、どうしたらいいですか、ということだけでした。

パスポートの再発行の手続きや、離婚調停の申し立て手続きの支援をする中で、彼女はパスポートがもらえれば自分も働けるので、日本に残って普通の仕事がしたいと思うようになりました。震災後の相談期間が終わった頃に、本人が離婚したいということで、法律相談に連れて行きました。

そのような支援をしているうちに、パープルダイヤルが終わって、困っている方の相談先が無く、私が支援団体を作らないと中途半端で残された問題が解決できなくなると思うようになりました。そこで、ウェラワーリーという団体を設立しました。多言語で外国人の同行支援と電話相談や同行通訳の活動をしています。

(やまざき ばちゃらー)